



牛と農夫とその妻と

松本 侑壬子・ジャーナリスト

夫婦と牛1頭を3年余り追いかけたドキュメンタリーである。現代の韓国でも牛を耕作に使う人はほとんどいないが、40歳の老牛と30年以上一緒に働いてきた老人の頑ななまでに変わらぬ生き方と口やかましいその妻。懐かしい農村風景の中には、牛をめぐる夫婦の微妙な愛情物語が詰まっている。

舞台となるボンファという農村地帯は、韓国人にとっては「守りたい自然が残っている場所」なのだという。そこに住むチェジいさんは79歳。家族同様の老牛は、平均寿命15年を大幅に超えている。膝やわき腹には糞だか泥だかが苔むしたようにこびりついている。じいさんを乗せたタイヤ付きのリヤカーを引く足取りは、まるで能面役者のすり足のようによ美でのろい。

じいさんは田んぼにも畑にも、耕運機も田植え機も農薬も一切使わない。畦に破れた靴を揃えて脱ぎ、素足で水田に入り、不自由な左足のまま四つん這いで田植えや草取りをする。農薬を使わないのは、牛の健康に悪いから。そのため、毎朝遠くまで草刈りに行き、安全な草を曲がった背に山盛りに担ぎ、杖にすがりながら戻る。便利な既製品の餌は買ったことがない。

「こいつは老いばれ牛だが、わしには人間より大切だ」がじいさんの口癖。そんな夫が妻のイさんは不満でならない。口をとがらせて「ふーっ

とため息をつきながら、文句たらたらだ。

「もう老いばれ牛なんて捨てて、機械を使ったらどうなの?」「農薬を撒かないから、牛にやる草を取りに行かなくちゃならないんだよ」「亭主が役立たずで私ばかりが働かされるんだ」…。

じいさんはそんな悪態に馬耳東風だが、ときどきは重い口を開く。「(買った) 飼料だと、牛が太って子を産まなくなる。わからんのか」

夫の頭の中は牛のことばかり、と妻は嘆く。「あの牛は幸せだ。不幸なのは私。牛には毎日餌をやるのに、私は放つたらかし。死ぬまでこき使われるだけだ」と、まるで牛と三角関係のよう。確かに、夫は妻には耳も貸さないが、老牛が鈴をカランと鳴らして低く「ム～」と鳴くだけで、すぐに立ち上がって傍に行く。「この牛は死ぬときも一緒だ。葬式をするときは、俺が喪主だ」「もし(牛が)先に死んだら、後追って死ぬよ」。ばあさん、あきれて、「何の因果でこんな男に嫁いだのか。16歳で100キロの道をはるばる嫁いできたのに」と。そして、かすれたトランジスタに合わせて歌うのだ。<時の流れは止められぬ。青春、私の青春、今どこに…>

じいさんの頭痛の診察に町の病院に行った帰りに、夫婦は写真屋で葬式用の記念写真を撮る。仏頂面のじいさんに、カメラの後ろから「笑え!」と叫ぶのは妻の愛情だ。

「牛を売ろう」とばあさん。「売らん」とじいさん。でも、頭痛が次第に強くなる夫は、やがて“その日”が来るのを知っている。そして…。

韓国で昨年空前のヒットとなったというこの映画。人の心を打ったのは、単に老牛と農夫の“純愛”だけだろうか。その奥に、まるで道化か悪役のように描かれた妻の愛の哀しさと強さこそ、見る者への忘れ難く痛い問いである。

『牛の鈴音』

韓国映画 (78分) / イ・チュンニョル監督

全国公開中

©2008 STUDIO NURIMBO

